

濱田直嗣 著

『政宗の夢 常長の現—慶長使節四百年』

（河北新報出版センター、2012年）

評者 坂東 省次

本書は、サン・ファン・パウティスタ号が慶長使節を乗せて宮城県月浦を発った1613年から400周年を迎える今年2013年に向けて、昨年2012年10月に刊行されたものである。

年が明けての1月に「宮城スペイン協会」から、次いで著者の濱田氏ご自身からご贈呈いただいたので、ここに紹介する。

著者の濱田氏は1966年に仙台市博物館に入り、学芸室長、副館長、館長を歴任、2010年から宮城県慶長使節船ミュージアム館長をされている。「慶長使節の歴史的、文化史的な解明に40年ほどを費やしてきた筆者は」（306頁）、慶長使節の決定版ともいえる『仙台市史 特別編8 慶長遣欧使節』の編集に責任者の一人として関わっており、文字通り慶長使節の生き字引的存在といえよう。

そんな濱田氏が慶長使節400年記念のために上梓した本書は、四六版300頁程度の本であるが、慶長使節に関する先行研究を十分に取り入れ、重要事項は余すところなく取り上げ、それらを見事にまとめた一書となっている。一級の慶長使節入門書として読まれることをお勧めしたい。

慶長使節とは、仙台藩祖の伊達政宗がメキシコとの通商と領内布教にあたる宣教師派遣の要請を目的に、臣下の常長とフランシスコ会士ソテロら20数名をスペインとローマに派遣した使節団のことである。

使節一行は、今から400年前の1613（慶長18）年10月28日に、使節船サン・ファン号で仙台領牡鹿郡月浦を出帆して、1614年1月28日にスペインの植民地ヌエバ・エスパーニャ（現メキシコ）のアカプルコ港に上陸する。その後メキシコシティを経由してベラクルス港よりサン・ヨセフ号で大西洋を越えてスペインに向かった。

1614年10月5日頃にスペイン南部サン・ルカル・バラメダ港に到着する。一行は各地で大歓迎を受ける中、セビーリャ、コルドバ、トレドを歴訪した後、時の国王フェリーペ3世の待

つ首都マドリードに入市する。常長は国王の面前で改宗を願い出て洗礼式に臨み、洗礼名ドン・フェリーペ・フランシスコ・ファシエクラを拝受する。さらにローマに赴いて教皇パウロ5世に謁見し、ローマ市の貴族に列するという荣誉に浴する。

こうして欧州における常長のプレゼンスはいやがうえにも上がっていったが、当初の目的を達成するには、大きな障害があった。それは常長を欧州に派遣した伊達政宗が改宗していなかったことであり、また日本でキリシタン弾圧が進んでいたからであった。

常長はローマ法王およびスペイン国王からの返書を所持することもなく、失意の内に、1620（元和6）年9月に仙台に帰還し、一年後に死去している。「支倉常長が没した1621年は、1月28日にパウロ5世がローマ教皇の座を去り、3月31日にスペイン国王フェリーペ3世が崩御した年でもある。レルマ公は3年前に失脚している。慶長使節に関わった最も重要な人物4人が舞台を去ったこの年は、また、伊達政宗の夢と支倉常長の苦闘に終止符が打たれた時にもなった。」（本書259頁）

2011年3月11日に起こった東日本大震災は多大な被害をもたらしたが、同時にサン・ファン号が月浦を出航した1613年から2年前の1611年に「慶長の三陸大津波」があったことを思い出す好機となった。

「慶長の時代と現代で人口や住居の規模を比較した場合、領内総人口が五十万人に遥かに達していなかった四百年前の千七百八十三人、或いは五千人の溺死者という数は、甚大な被害を物語るだろう。」（49-50頁）

著者の濱田氏は、伊達政宗が震災直後に慶長使節派遣の構想を本格化しはじめた事実注目し、慶長使節の研究に災害史の分析という新たな課題を加えようとしている。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）